

第3次大空町総合計画 基本構想（素案）

も く じ

I	はじめに	1
1	この計画について	1
(1)	計画策定の趣旨	1
(2)	計画の位置づけ	1
(3)	計画の期間と構成	2
2	計画の背景	3
(1)	大空町の概要	3
(2)	大空町を取り巻く環境	5
(3)	大空町の課題や可能性	7
II	基本構想	9
1	めざす町の姿	9
(1)	将来像	9
(2)	めざす指標	10
2	5つの基本目標	11
(1)	基本目標1 魅力やうるおいを生み出す産業を展開するまちづくり	11
(2)	基本目標2 すこやかでおだやかな生活ができる福祉のあるまちづくり	11
(3)	基本目標3 夢と学びがひろがり未来につながるまちづくり	11
(4)	基本目標4 これからの住みやすさを支えるまちづくり	12
(5)	基本目標5 未来につながる持続可能なまちづくり	12
	【重点的に進める施策】	13

I はじめに

1 この計画について

(1) 計画策定の趣旨

平成 18(2006)年に大空町が誕生し、はじめての総合計画を策定してから 20 年が過ぎました。

第1次計画(平成 18 年度から平成 27 年度までの 10 年間)では、平成 24(2012)年度に「大空町自治基本条例」を制定し、総合計画を町の最上位計画に位置づけ、町民と行政の協働を基本に、新たな枠組みでのまちづくりを進めました。

第2次計画(平成 28 年度から令和7年度までの 10 年間)では、国が掲げる地方創生をめざし、移住・定住につなげる取組に力を入れてきました。最大の課題である人口減少は歯止めがかからず、厳しい状況が続いていますが、国が新たに掲げた「地方創生 2.0*」を踏まえ、人口規模の縮小に適応できるまちづくりを進めていくことが求められています。

このような社会情勢の中、2次計画の計画終了に伴い、新たに「第3次大空町総合計画」を策定することとなりました。

* 地方創生 2.0:「当面は人口・生産年齢人口が減少するという事態を正面から受け止めたうえで、人口規模が縮小しても経済成長し、社会を機能させる適応策を講じていく」という考えのもと、これまでの地方創生施策を進化させ、地方が持つ潜在力を最大限に引き出すための新たな取組。

(2) 計画の位置づけ

「総合計画」の位置づけ、他の計画との関係は次のとおりです。

○大空町のまちづくり計画の中で最上位に位置する計画です。

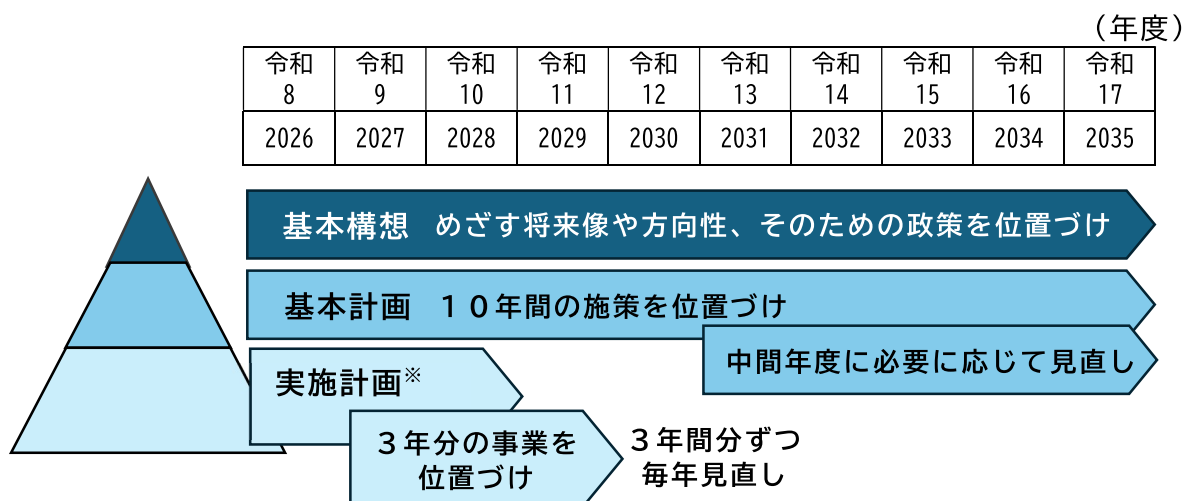
○まちづくり全体にかかる方向性や取組が示されていますが、まちづくりの各分野で策定している「個別計画」の内容と整合性を持つようにしています。

○本計画と同じ令和8(2026)年度にスタートする「第3期大空町まち・ひと・しごと創生総合戦略(通称:総合戦略)」と整合性を持つようにしており、総合戦略の施策は、本計画の重点施策にも位置づけます。

(3) 計画の期間と構成

計画の期間は、令和8(2026)年度から令和17(2035)年度までの10年間です。
計画の構成は、「基本構想」「基本計画」「実施計画」の3つです。

基本構想	めざす将来像や方向性、政策などを位置づけます。
基本計画	基本構想で示した将来像や方向性、政策を実現するための「施策」が示されています。 中間年度(5年後)に必要なに応じて見直すこととします。
実施計画	基本計画で示した「施策」を具体的に進めるための「事業」が示されています。 3年分の事業を位置づけ、毎年、向こう3年間分を毎年度見直ししながら進めることとします。



※「実施計画」は別冊で作成します。

2 計画の背景

(1) 大空町の概要

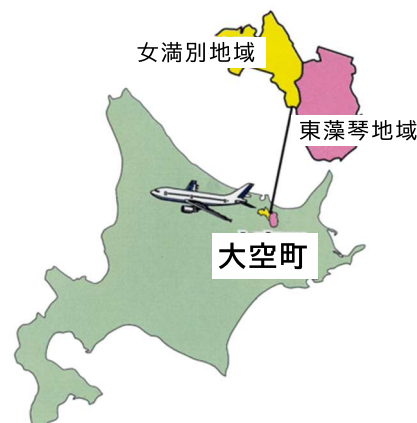
大空町は、北海道北東部に位置し、南に藻琴山、北に網走湖がある、総面積約 344 km²の町です。中央部は畑作地帯、西部の網走川沿岸の平地は稲作地帯、南部の藻琴山山麓は酪農地帯が広がっています。

気候は、オホーツク海沿岸の典型的な気候で、降水量が少なく晴天に恵まれる日が多く、一年を通じて比較のおだやかな気候です。

主な交通基盤として、JR石北本線、国道 39 号と国道 334 号及び道道 6 路線が通っているほか、女満別空港が所在し、旅客・貨物のオホーツク地域への玄関として、地域の活性化に大きな役割を果たしています。

農業が盛んで、全町の4割近くが耕地です。日本最東端の米の作付けをはじめ、麦類、馬鈴薯、甜菜（グラニュー糖の原料）、豆類、野菜と多岐にわたって栽培されています。

また、町内には、網走湖や藻琴山などの豊かな自然や、メルヘンの丘、東藻琴芝桜公園など美しい風景を見ることができ観光スポットがあります。



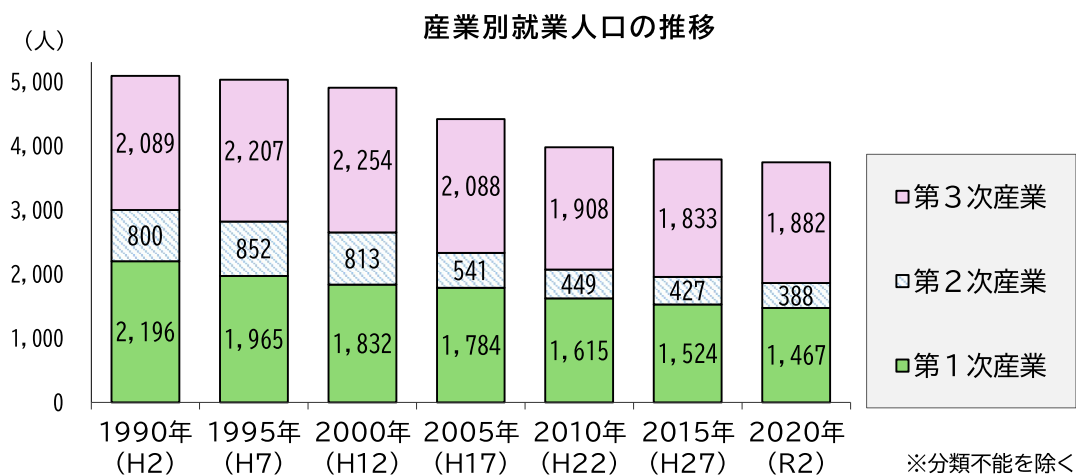
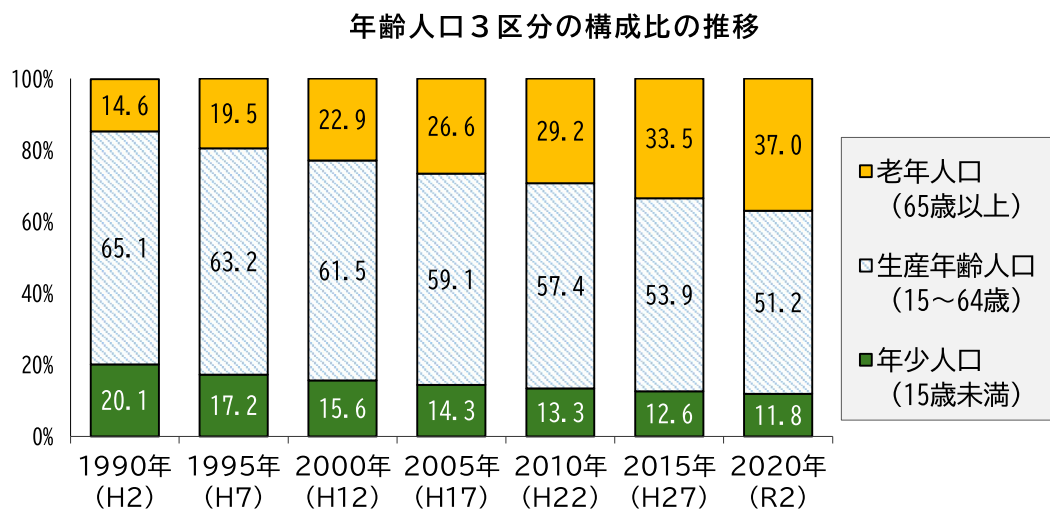
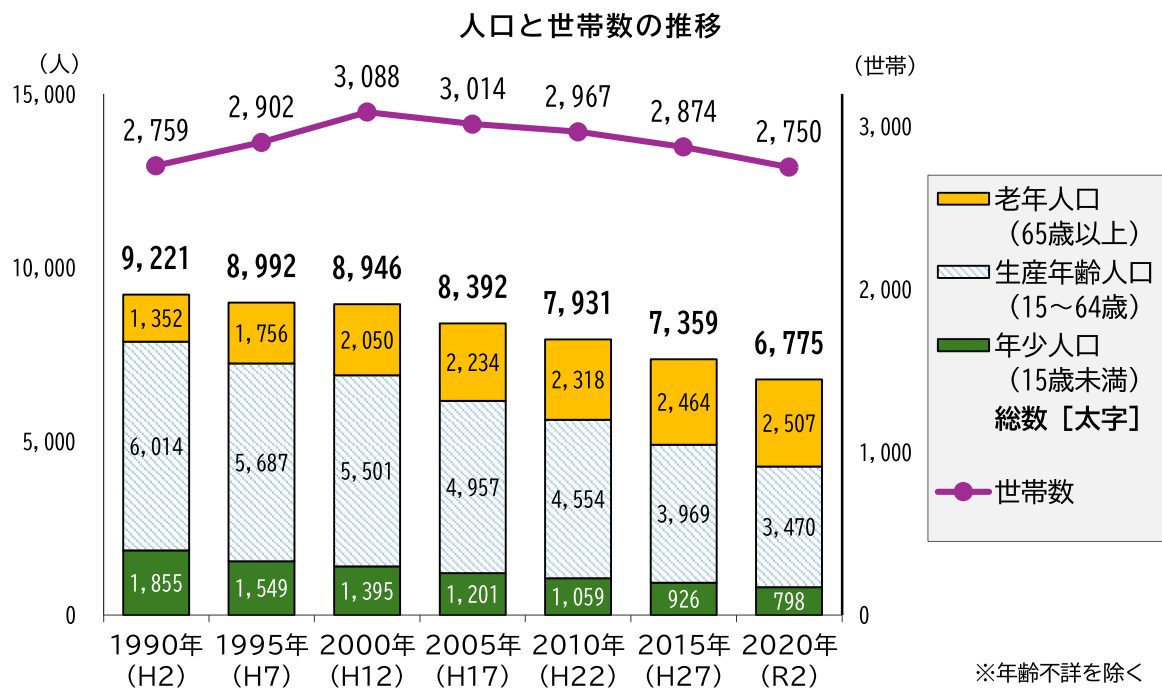
本町は女満別地域（旧女満別町）と東藻琴地域（旧東藻琴村）で構成しています。両地域は網走町の一地域で、分村をへて東藻琴村と女満別村（その後女満別町）となり、それぞれまちづくりを進めてきました。そして平成 18（2006）年に女満別町と東藻琴村が合併し、「大空町」が誕生しました。

澄み切った大空、大空の下に広がる実り豊かな大地のもとで、町民が夢や希望を持ち、晴れ晴れした気持ちで暮らしていくことができる町に、という願いを込めて「大空町」と命名されました。

本町の総人口は 6,775 人、世帯数は 2,750 世帯です（令和 2（2020）年の国勢調査より）。全国同様に総人口、世帯の減少が続いています。また、少子高齢化の傾向が続いており、平成 7（1995）年からは年少人口（15 歳未満）よりも老年人口（65 歳以上）が多い状況が続いています。

産業別の就業人口を第 1 次～第 3 次の産業分類*でみると、主要な産業が農業であることから第 1 次産業の割合が高い町ですが、小売業やサービス業などの職業に就く人が増える中、平成 7（1995）年からは第 3 次産業の人口が第 1 次産業の人口よりも多くなっています。

* 第 1 次～第 3 次の産業分類：第 1 次産業は農業・林業、漁業、第 2 次産業は製造業、建設業、鉱業など、第 3 次産業は小売業、宿泊業、飲食サービス業、医療・福祉業、金融業、情報通信業などの業種。



(2) 大空町を取り巻く環境

大空町を含む全国の自治体を取り巻く環境（動き）と、それに対応する共通課題を、いくつかの視点からまとめると、次のとおりです。

○日本の人口構造の変化

～日本の人口は平成 20(2008)年をピークに減少傾向が続いています～

【取り巻く環境】

令和2(2020)年の国勢調査によると、日本の総人口は約 1 億 2,614 万人でしたが、約 30 年後の 2055 年頃には、1 億人を下回ると予想されています。また、平成9(1997)年からは年少人口(0～14 歳)よりも老年人口(65 歳以上)の方が多くなり、その後も年少人口と生産年齢人口(15～64 歳)の割合は減り続けています。

人口急減・超高齢化という状況に直面する中、国は「地方創生 2.0」を掲げ、人口規模が縮小しても経済が成長し、社会を機能させる適応策を講じていくとしています。

【共通課題】

人口減少と高齢化は自治体運営にも大きな影響を与えています。地方創生の取組を推進するとともに、支出や収入の管理、公共サービス提供の最適化、人材の確保などを行い、持続可能な自治体経営を維持していくことが求められています。

○気候の変動

～国内外で深刻な気象災害等が発生しています～

【取り巻く環境】

地球温暖化が進み、豪雨や猛暑のリスクが更に高まると予想されています。

環境問題は世界共有の課題であるとの認識のもと、気候変動の原因である温室効果ガスの排出削減と、吸収に向けた取組が各国で行われています。

同時に、将来予測される気候変動の影響に適応できるよう、各分野で対策を講ずる動きも見られます。

【共通課題】

自治体においても、低炭素(脱炭素)社会の実現をめざし、低炭素(脱炭素)化に向けた取組を加速することが求められています。

また、自然災害の激甚化や頻発化、農林水産物への影響などが懸念される中、防災対策の見直しや気候変動による農林水産分野の被害を減らすための適応策の実施が求められています。

○グローバル化

～人やもの、資本、情報などが地球規模で移動、流通しています～

【取り巻く環境】

貿易や投資などを通じた世界中との経済的な結びつきが深まり、国際競争が激化する一方で、ビジネスチャンスも拡大しています。

日本でも、外国人労働者や外国人観光客の増加など、日常生活の中でグローバル化を感じる場面が増えています。

【共通課題】

自治体においても、人材確保や経済の活性化を考えるうえで、外国人の存在は欠かせないものとなっており、グローバル化に対応したまちづくりが求められています。

○デジタル化

～インターネットが普及し、デジタル化が急速に進んでいます～

【取り巻く環境】

デジタル技術の普及により、オンラインやリモートで対応できることが増え、AI（人工知能）の利活用も急速に進んでいます。

対面からリモート、紙媒体から電子媒体、現金からキャッシュレスなど、身近な場面でもデジタル化が進む中、国はデジタル技術を用いて新たな価値を創出する改革（DX^{*1}）を推進しています。

【共通課題】

リモートワークの普及により移住する人が増えたり、リモートやAIを活用して課題を解決しようとしている地域も見られます。デジタル化を地域課題の解消や地域の活性化に活用していくことが求められています。

○価値観の多様性

～多様な価値観を認め合うことが大事であるという考えが普及しています～

【取り巻く環境】

持続可能な社会の実現をめざすには「多様性、公平性、包括性^{*2}」が大切であるという考えが若い世代や企業を中心に普及しつつありますが、それを受け入れない価値観も存在します。

幸福や生きがいの捉え方も、経済的な豊かさのみならず、精神的な豊かさ、健康など、一人ひとりによって多様化しています。

【共通課題】

国が各政策で「幸福感（ウェルビーイング）」を重視し、自治体においてもまちづくりのキーワードとなる中、幸福に対する価値観が多様化していることを踏まえ取り組んでいくことが求められています。

*1 DX:デジタルトランスフォーメーションの略。今までの業務を単にデジタルに置き換える（デジタル化）のではなく、デジタル技術を活用して、新たな仕組みやより一層便利なサービスを生み出すために変革していくこと。

*2 多様性、公平性、包括性:価値観や考え方も含め、さまざまな違いがあること（多様性）、一人ひとりのニーズに合わせて適切に対応すること（公平性）、すべての人が歓迎され、尊重されていると感じられること（包括性）を重視する考え。

（３）大空町の課題や可能性

アンケート調査や大空町を取り巻く課題などから、大空町のまちづくりにおける課題や可能性を見てみると、次のとおりです。

※関連するアンケート調査結果については「資料編」など別途掲載します。

住みにくさにつながる不安、不満を解消する

住みよいまちづくりは、最も大切な課題であり、大空町でも重要性はますます高まっています。

アンケート調査で、現在の大空町の住みよさと、今後の定住意向（住み続けたいか）を尋ねると、住みよさは年代の差が少ない一方、定住意向は年代が高いほど「住み続けたい」が高くなっています。しかし、10年前の回答結果と比較すると、80代以上で「住みよい」の割合が、60代で「住み続けたい」の割合が、それぞれ10年前より減っています。また、「住み続けたい」と回答しなかった理由について、60代は「ここで老後も生活を続けていくことに不安があるから」という回答が特に高くなっています。

住みよさを高めるには、各年代の住みづらさを解消することが大事ですが、中でも、高齢者が感じる住みづらさや、老後が近づいてきた人たちの不安を解消していくことが重要です。

また、年代を通して、住みにくさや町外に移りたい理由として高い割合であげられているのは、前回と同じく「交通の不便さ」です。中高生は「バスや鉄道などの交通が不便」という回答が前回より高まり、今回第1位になっています。

前回よりも高くなった「日常生活が不便」、前回と同様に高い「医療や福祉面が不安」なども含め、住みよいまちづくりを進めていくには、長年続いている不満を解消していくことが重要です。

こどもや子育て世代の評価を維持、向上させる

前回の調査結果と比べて、改善の兆しが見えた部分もあります。

中高生の定住意向は今回の方が高く、子育て世代である40代の定住意向も、前回よりも下がったものの、他の年代よりも小さい差にとどまっています。

また、小中高校生からは、大空町に対する肯定的な声が多く寄せられたほか、40代・50代の子育て支援への満足度は、前回より高くなっています。これらのことを踏まえると、こどもや子育て世代からは、こどもや子育て支援に関する取組が一定程度評価されていることが伺えます。

「こどもまんなか社会^{*1}」や「若者・女性にも選ばれる地方^{*2}」が全国で推進される中、本町においても、こどもや子育て世代の声を聞きながら、この状況を維持、向上していくことが重要です。

*1 こどもまんなか社会：こどもたちのために何がもっともよいことかを常に考え、こどもたちが健やかで幸せに成長できる社会。

*2 若者・女性にも選ばれる地方：地方創生 2.0 がめざすひとつの方向性として「若者・女性にも選ばれる地方」を掲げている。

人口減少の抑制、地域の活性化につながる産業を振興する

人口減少を抑制するには、生活を支える「働く場」が重視されますが、主要な産業である農業生産の場でも効率化・省力化が進んでおり、「働く場」を増やしていくことは難しい状況です。また、一次産業が求める労働力と「働く場」は一致していない状況も見られます。

一方、豊かな自然や美しい景観があり、空港が町内にある本町では、観光や来訪を意識した産業振興を期待する声が多くありますが、それらの強みをいかしきれていないという声も少なくありません。

一次産業の安定を維持しつつ、働きたい、滞在してみたい、仕事を始めてみたいという人たちに積極的に働きかけ、産業・事業の創出や定住・関係人口の拡大につなげていくことが重要です。

商業については、町民の買物や消費のスタイルは多様化していますが、町内で買物や飲食できる場、サービスを受ける場などが減り、不安や不満を感じる町民は少なくありません。交流の場や居場所の減少にもつながり、交流や滞在の楽しみが減り、地域の活気にも影響します。

住む人も訪れる人も魅力を感じ、地域の活性化にもつながる商業を維持、振興していくことが重要です。

「大空町」だからできることをもっといかす

大空町が誕生して 20 年がたちました。大空町で生まれたこどもも 20 歳を迎えるような年月が過ぎたことになります。

特色のある2つの地域を持つ町が誕生したことで、まちづくりの可能性が広がったという声がある一方で、大空町として一体感を未だに感じる方が少ないという声もあります。

異なる地域特性を持ち合せていることは、町外へのアピール要素など、大空町の強みとしていかすことができます。この 20 年間で新たに誕生したこどもたち、結婚を機に来られた方、移住先として大空町を選ばれた方など、新たな町民も増えている中で、大空町の特性をいかし、アピールしていくことが重要です。

また、一体感を感じづらい要因として、行き来のしにくさなど物理的な要因が大きな影響を与えています。町民が異なる地域特性を町のよさとして感じるためには、移動のしやすさや施設のあり方など、生活基盤の改善などについても取り組んでいくことが重要です。

Ⅱ 基本構想

1 めざす町の姿

(1) 将来像

大空町を取り巻く環境は、めまぐるしく変化し続けています。

不確実で将来を予測するのが困難と言われる現代において、10年後の日本や世界の姿を想像することは難しいですが、これからも、だれもが暮らし続けることができる大空町をめざし、未来につなげていきたいと考えます。

そのために、だれもが「安心」を感じられる土台をしっかりと築きながら、変化する環境にも力を合わせて対応し、大空町に住むすべての人が未来への希望を持てるまちづくりを進めます。

このようなまちづくりへの気持ちを込めて、「第3次大空町総合計画」の将来像を、次のように定めます。

安心と希望を未来につなぐまち 大空町

安心

医療や福祉、生活基盤の充実などで安心の土台を築き、子育て世代も高齢になっても安心して暮らせるまちになることをイメージしています。

希望

こどもたちの希望を育むことを大切にし、こどもや若者が個人として尊重され、教育の充実などにより自分らしく幸せに生きることができるまちになることをイメージしています。

未来につなぐ

まちの魅力が高まることで、産業の振興や雇用創出が進み、多様な人たちがいろいろな場で活躍する地域となり、持続可能なまちになることをイメージしています。

(2) めざす指標

①人口

これまでの人口の推移（国勢調査より）		
平成 22 (2010)年	平成 27 (2015)年	令和2 (2020)年
7,933 人	7,360 人	6,775 人

めざす人口
令和 17 (2035)年

人口の指標については、総合戦略の施策も踏まえ、今後設定します。
なお、今年は国勢調査の年ですが、市町村の結果（速報値）が発表されるのは、通常翌年2月あたりとなるため、近年の人口の推移から令和7（2025）年を推測^{*1}したうえで、令和17（2035）年の人口を設定することとします。

^{*1} 令和3（2021）年から令和5（2023）年の3年間で 337 人減少しており、5年間に換算すると 562 人減少と推測され、令和2年国勢調査の実績 6,775 人-562 人=6,213 人となるため、令和7（2025）年は 6,200 人台前半ぐらいではないかと推測。

②住みよさ

第2次計画では、町民アンケートの「大空町の住みよさ」について、「住みよい」または「どちらかといえば住みよい」と答えた人の割合が 85.0%を上回ることをめざしていました。

令和6（2024）年度に実施したアンケートでは、「住みよい」または「どちらかといえば住みよい」と答えた人の割合は 81.7%でした。

今回も引き続き、『住みよい^{*2}』と答えた人の割合を指標として位置づけることとします。

これまでの『住みよい』と答えた人の割合 （町民アンケート調査より）		
平成 18 (2006)年	平成 26 (2014)年	令和6 (2024)年
69.5%	80.7%	81.7%

めざす 『住みよい』の割合
令和 17 (2035)年
85.0%

^{*2} 『住みよい』:「住みよい」と「どちらかといえば住みよい」の合計。

2 5つの基本目標

(1) 基本目標1 魅力やうるおいを生み出す産業を展開するまちづくり

地域経済を支える安定した農林水産業、大空町の資源をいかし来訪や交流人口を生み出す観光、町民の生活を支え、地域に活気や活力を与える商工業など、それぞれの分野での発展はもちろん、相互の連携により一層振興することで、大空町の魅力を高め、うるおいを生み出す産業が幅広く展開されるまちづくりをめざします。

「基本目標1」に関するまちづくり項目	1 農林水産業 2 観光産業 3 商工業、特産品 4 雇用、労働力、産業創造
--------------------	---

(2) 基本目標2 すこやかでおだやかな生活ができる福祉のあるまちづくり

こどもからお年寄りまで、だれもが心身ともにすこやかに過ごせるまちづくりをめざします。
また、年齢や世帯構成、置かれる状況が異なっても、だれもが大空町で、おだやかに生活することができるまちづくりをめざします。

「基本目標2」に関するまちづくり項目	1 保健、医療 2 地域福祉 3 こども・子育て支援 4 高齢者福祉 5 障がい者（児）福祉 6 社会保障
--------------------	--

(3) 基本目標3 夢と学びがひろがり未来につながるまちづくり

学びやスポーツをとおして一人ひとりの夢や視野などがひろがり、未来を拓く人を育てるまちづくりをめざします。

また、色々な世代の人が学びやスポーツによってつながることで、知の好循環が生まれ、未来に向かって続いていくまちづくりをめざします。

「基本目標3」に関するまちづくり項目	1 学校教育 2 生涯学習、社会教育 3 スポーツ 4 地域文化
--------------------	---

(4) 基本目標4 これからの住みやすさを支えるまちづくり

人口減少や高齢化に対応し、環境保全を意識した生活基盤を整え、維持していくことで、年代や住んでいる場所に関わらず、だれもが住みやすく、また、住み続けられるまちづくりをめざします。

また、日常生活の中で起こりうる危険な状況から町民の生命や財産を守り、安心・安全に過ごせるまちづくりをめざします。

「基本目標4」に関するまちづくり項目	1 市街地、住環境
	2 道路
	3 公共交通、移動支援
	4 上下水道
	5 生活環境
	6 消防、救急、防災
	7 交通安全、防犯、消費者対策

(5) 基本目標5 未来につながる持続可能なまちづくり

まちづくりに関する情報や課題を多くの人と共有し、より住みよいまちづくりに向けて立場をこえて協働することで、難しい課題も解消し、希望が持てる未来へとつながるまちづくりをめざします。

また、大空町の魅力を発信し、町民が住みよさを感じたり、魅力にひかれて多くの人が訪れたりすることで、移住や定住につながっていくまちづくりをめざします。

「基本目標5」に関するまちづくり項目	1 関係人口、移住、定住
	2 情報、デジタル化
	3 自治体経営
	4 共生社会
	5 地域脱炭素
	6 協働によるまちづくり

【重点的に進める施策】

基本計画の施策に基づき、人口減少対策を目的とする施策や（総合戦略と連携）、この10年間で大空町が重点的に進める施策などを位置づける予定です。